

江戸の実用書「小謡本」の編集

—— 蔦屋・鱗形屋の方法 ——

原八千代（法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程）

概要

謡曲のさわりを集めた「小謡本」は、江戸時代を通じて多くの版元から出版されていた。同じような小謡を同じように掲載する小謡本は、相互に比較できるという稀有な特質をもつため、これにより版元の特徴が明らかになる。江戸後期の出版をリードした有名版元・蔦屋重三郎の小謡本と、江戸初期から200年の歴史をもつ老舗版元・鱗形屋孫兵衛の小謡本はどのようなものであったか。実用書の編集技術の観点から、両者の方法を読み解く。

キーワード：編集者が見た江戸の本づくり、江戸の実用書の編集方法、老舗・鱗形屋の小謡本、蔦屋重三郎の小謡本

(1) 編集者が見る「江戸の本づくり」とは

編集者は、いわば「黒子」であることを誇りとする仕事。本が正しく美しくあること、そして人々に役立つことを目指す「物づくりの職人」である。だから、本に自分の足跡を残したり、自分の仕事を語ったりしないのがこの仕事の美学である。しかし、それだからこそ、職人的な技術の冴えが本の中に垣間見えることがある。そういう本を手にしたときにわき起こる感動は、本をつくりあげた人々の思いが伝わるからなのかもしれない。これは、作者がある本もない本も同じであり、江戸の本も現代の本も同じである。

いや、江戸と現代では時代が違うと言う人もいるかもしれない。たしかに、江戸の本はすべてが手づくりであり、現代は工業製品で流通の仕組みも全く違っている。だが、本の企画・編集・制作・販売における創意工夫が「人の力」であることは、今も昔も変わらない。これは本づくりに限らず、世の中の仕事すべてに言えることでもあろう。

「本」という研究対象に、「本づくり」という人間的な視点を盛り込めないだろうか。文学研究においては作品や作者は扱われるが、それらを生み出した土壌である本づくりまでの言及はない。版元研究や出版史研究にしても同様である。

今、時代が大きく変わり、本づくりも大きく変わってきている。これまで語られることのなかったこれらの人々の仕事を、我々はすっかり忘れ去ってしまっただけなのであろうか。乏しい編集体験しかない私にそれを語る資格はないかもしれないが、新たな視点をもつことで、少しでも「本づくり研究」の糸口をつかむことができたらと思っている。

(2) 「小謡本」という実用書から見えること

華やかな文芸書や雑誌が並ぶ書店の棚の奥には、種々多様な「実用書」の世界がある。これらを屋台骨とする出版社も多く、実用書の数のほうが圧倒的に多いのである。

江戸時代も同様である。辞典は節用集、教養は往来物、日常生活は重宝記、占いは大雑書、音曲は浄瑠璃や長唄などの稽古本というふうには、さまざまなジャンルの実用書が刊行されていた。すでに研究が進んで全

集が出ているものもあるが、全く忘れられているジャンルがある。それが謡曲のさわりを集めた「小謡本」である。

小謡本は、江戸初期から幕末まで 300 近い版元から出されていた。小謡を並べただけの同じような本であるが、これだけ長い期間、これだけ多くの版元から出し続けられたものは他には聞かない。今に残る小謡本だけでも 400 種以上あり、江戸時代には膨大な量が刊行されていたと思われる。本の数はそれだけの需要があったことを示している。本は時代を映す鏡なのであり、時代の必然性なくして本は生まれない。

江戸時代、能や謡曲は武家だけの教養だったと思われるが、じつは謡曲は庶民にも大変に親しまれていた。小謡については寺子屋でも習われていたのである。かつて小学校や中学校で歌われた「文部省唱歌」のように、小謡は誰もが知っていて口ずさめるほどに普及しており、結婚式などのめでたい席で必ず謡われた小謡もあった。

小謡本の研究は、50 年ほど前、法政大学教授であった能楽研究の泰斗・表章氏が、『鴻山文庫本の研究』（1965 年、わんや書店）で、法政大学能楽研究所蔵の小謡本の詳細な調査結果を示した。しかし、それ以降、小謡本の研究はほとんど行われることはなかった。それは、表氏がその書で小謡本は謡曲研究において「無価値」とされたことと、文学研究で謡曲は中世、出版は近世という厳然たる時代区分があったことが原因だと思われる。

また、江戸時代の文学・芸術・文化全般にわたって謡曲は大きく影響しているのだが、なぜかこのことも声高には語られてこなかった。西鶴も芭蕉も秋成も一丸も、浄瑠璃も歌舞伎も長唄も、浮世絵や着物や日常の道具にまでも、謡曲は広く深く浸透していた。

小謡本から見えてくるのは、そのような江戸の謡曲と出版の知られざる実態である。

(3) 蔦屋・鱗形屋の小謡本を比べてみると

小謡本は家元からの制限がなく自由に発行できたため、多くの版元が出版に参入できた。だいたい決まった小謡を順番に並べるだけの本であるが、そのような本だからこそ、かえって版元の本質があらわれる。そして、小謡本には各版元によりさまざまな工夫が加えられ、さながら版元による小謡本の競演ともいうべき様相が展開していくことになるのだが、小謡本は共通の内容でつくられ、相互に比較が可能であるという稀有な特質をもつために、これによって版元の特徴を明らかにできるのである。

ベストセラー小説や浮世絵などを次々に刊行した江戸の版元・蔦屋重三郎は、その名を知らない人はいないほど有名である。いっぽう鱗形屋は、江戸初期から 200 年も続いた老舗の版元であるが、一般にはあまりよく知られていない。初代三左衛門から後の孫兵衛と続き、挿絵入りの古浄瑠璃本や子ども向けのお伽噺の赤本などを刊行して、大人から子どもまで楽しめる本屋として江戸の人々に大変親しまれていた。

蔦屋の小謡本はたったの 2 種、鱗形屋は小謡本としてはかなり多い 8 種である。これらは決して主力商品などではない地味な出版物であるが、同時代の小謡本の中に両者の小謡本を置いて比較してみると、その編集の特色がはっきり浮かび上がってくる。

老舗の鱗形屋の小謡本には、伝統的な小謡本に従ってどれも丁寧なつくりがなされており、新進の蔦屋の小謡本には、時代の先端をいく洒落た工夫がなされていることがわかる。安永期（1772～1781）、鱗形屋らが出していた「吉原細見」という定期刊行物の刊行に加わった蔦屋は、以後その権利を一手に掌握し、天明 3 年（1783）、新吉原大門口から日本橋の大通りに店を構えて大躍進するが、蔦屋の最初の小謡本は、この出店の品揃えに間に合うようにつくられたのではないかと推測できる。そして、その頃までには、鱗形屋



(上) 鳶屋重三郎刊『童宝小謡揃千秋楽』(天明3年(1783))鈴木俊幸氏蔵。

(下) 鱗形屋孫兵衛刊『当流/小うたひ/百三十一番』(刊年不明) 架蔵。

嘉永2年(1849)、上州屋政次郎が鱗形屋の版木を用いて出版したものが。

は惜しまれつつも活動を停止せざるを得なくなる状態に陥っていた。鱗形屋から蔦屋に移っていく時代のありようが、小謡本からも読み取れるのである。

時代が変転する今だからこそ、「本づくり」とは何かについて考えてみたいと思う。

【発表者経歴】

1957年、愛知県西尾市生まれ。

1980年、愛知教育大学教育学部卒業。公立小中学校教諭として3年間勤め、1983年上京。

1989年、東京法令出版(株)正社員。消防・救急関係の実用書の編集制作を担当。

1994年、(株)ペリかん社正社員。学術書籍・雑誌の企画・編集・制作を担当。辻惟雄監修『全生庵所蔵 幽霊名画集』(1996年、2008年ちくま学芸文庫に再録)をはじめ、江戸文学・美術書等の企画編集、雑誌「日本の美学」「江戸文学」の編集制作を担当。

1999年、フリーランス編集として独立。小学館、集英社、岩波書店、柏書房、東京堂書店、淡交社、文藝春秋社等で、書籍等の企画・編集・制作等を担当。

- 小学館では、「新編 日本古典文学全集」近世分野の編集、「江戸検定」の副読本の編集等を担当。単行本の企画編集では、アダム・カバット『江戸化物草紙』(1999年、2015年角川ソフィア文庫に再録)、黒田日出男『謎解き伴大納言絵巻』(2002年)等を担当。2007年～2009年「日本の古典を読む」シリーズ20冊、小学館創業90周年記念企画『日本の歳時記』(2012年)編集に参加。教育編集部では、雑誌「教育技術」連載「教科のアイデア」の編集を2009年4月～2020年3月まで担当、MOOK編集等も担当。小学館アカデミーでは、「古文書塾てらこや」の運営にかかわり、通信教育テキスト「古文書のいろは」(2006年)を編集。

- 集英社では、集英社新書創刊期の企画編集として、田中優子『江戸の恋』(2002年)、同『樋口一葉「いやだ!」と云ふ』(2004年)、ヴィジュアル版では、田中優子『江戸を歩く』(2005年)、辻惟雄『奇想の江戸挿絵』(2008年)、小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』(2008年)を担当。また、集英社文庫の校正を2002年～2005年、グループで担当。

- 岩波書店では、「岩波アクティブ新書」(2002年～2004年)の校正をグループで担当。

- 柏書房では、大型事典『絵でよむ 江戸のくらし風俗大事典』(2004年)を企画編集、古文書入門書としては、アダム・カバット『妖怪草紙 くずし字入門』(2001年)、菅野俊輔『書いておぼえる 江戸のくずし字いろは入門』(2006年)等を企画編集。

- 東京堂書店では、長友千代治『近世上方浄瑠璃本出版の研究』(1999年)編集。

- 淡交社では、雑誌「なごみ」に田中優子連載「きもの歳時記」(2004年)を企画編集、『きもの草子』(2005年)刊行。同書は2010年ちくま文庫に再録、2019年に中国で翻訳刊行。

- 文藝春秋社校閲部ほか各社にて、校正・校閲を担当。

2016年4月、早稲田大学大学院文学研究科修士課程に入学。近世文学を専攻。

2019年3月、同校修了。修士論文は「江戸の小謡本出版—蔦屋・鱗形屋を中心に—」。

2020年4月、法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程に入学。能楽研究所のある法政大学で、小謡本の能楽的意味や謡曲の近世文芸への影響について研究中。

(主な著書・論文)

「江戸の小謡本と地本問屋—能面囃入小謡本の流行を中心に—」(能楽学会誌「能と狂言」2020年9月刊行予定)